

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第5号

《研究ノート》

平底円筒形押型文土器に関する一考察
今村 結記

縄文時代の安山岩製スクレイパーについて
桑波田 武志

鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介
黒川 忠広

古代から中世における遺構の方向
―農業開発総合センター遺跡群を事例として―
東 和幸

鹿児島県内の平安時代の土器供膳具の様相
―川内平野の資料を中心に―
岩元 康成

赤色顔料の原料採取地を求めて
―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から―
内山 伸明・橋本英樹ほか

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ）
永濱功治・内山伸明・中村幸一郎

鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題
―埋蔵文化財センターの取り組みを中心に―
馬籠 亮道

埋蔵文化財を活用した授業の展開
國師 洋之

《資料紹介》
堅野冷水窯跡出土遺物の追加報告
―物原Ⅰを中心に―
関 明恵

西ノ平遺跡出土墨書土器
長崎 慎太郎

荘上遺跡出土資料
―その1―
森 幸一郎

科学分析報告一覧
南の縄文調査室

放射性炭素年代測定集成
内山伸明・園田ひとみ・長野眞一

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2012. 3

縄文の森から 第5号

平底円筒形押型文土器に関する一考察 今村 結記	1
縄文時代の安山岩製スクレイパーについて 桑波田 武志	8
鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介 黒川 忠広	16
古代から中世における遺構の方向 ―農業開発総合センター遺跡群を事例として― 東 和幸	28
鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相 ―川内平野の資料を中心に― 岩元 康成	37
赤色顔料の原料採取地を求めて ―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から― 内山伸明・橋本英樹・古谷充章・團野瑛章・辻広美・高田潤	47
トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ） 永濱功治・内山伸明・中村幸一郎	55
鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題 ―埋蔵文化財センターの取り組みを中心として― 馬籠 亮道	59
埋蔵文化財を活用した授業の展開 國師洋之	69
〈資料紹介〉 豎野冷水窯跡出土遺物の追加報告 ―物原Ⅰを中心に― 関 明恵	75
〈資料紹介〉 西ノ平遺跡出土墨書土器 長崎 慎太郎	87
〈資料紹介〉 荘上遺跡出土資料 ―その1― 森 幸一郎	95
科学分析報告一覧 南の縄文調査室	99
放射性炭素年代測定集成 内山伸明・園田ひとみ・長野眞一	106

平底円筒形押型文土器に関する一考察

今村 結記

Study on the Flat Bottom of the Cylindrical with Stamped Design

Imamura Yuki

要旨

本稿では、桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて、まずこれまでの各研究者の見解を概観した上で考察を行う。検討にあたっては、楕円文の施される資料に着目した。その結果、桑ノ丸式器形の押型文土器は、稲荷山式土器～下菅生B式土器段階に位置づけられるとした。なお、施文方向を重視すればさらに限定できるだろう。

キーワード 平底円筒形押型文土器、桑ノ丸式器形の押型文土器、連珠状を呈する楕円押型文

1 はじめに

従来、南九州出土の押型文土器は、いわゆる大分編年を援用して位置づけることが多かった。しかし、近年南九州独自の押型文土器編年案が複数提示され議論が活発化している。こうした流れの中、筆者も宮崎県宮崎市の船引・時屋・鹿村野地区出土の押型文土器を対象に型式学的検討を行った（今村2010、以下前稿とする）。各研究者間において細かい差異はあるもののおおまかな変化の方向性は一致している。最も大きな違いは山下大輔・楽畑光博両氏（山下・楽畑2007）などが指摘しているが平底円筒形押型文土器の中でも桑ノ丸式器形の押型文土器と大分編年つまり東九州の押型文土器との併行関係である。そのため本論では、桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて、改めて検討を加えていきたいと考えている。

なお、桑ノ丸式器形といっても、下剥峯式土器や辻タイプにも同様の器形がある¹⁾。筆者はこのような押型文土器を下剥峯・桑ノ丸系押型文土器と呼称している。本稿で検討する桑ノ丸式器形の押型文土器とは、口唇部が内傾する一群で、前稿で下剥峯・桑ノ丸系押型文土器1式と設定した段階に含まれる。口縁部形態以外の特徴としては、胎土に金色の雲母片を含むものや内面調整がミガキやケズリのものが一定量みられるという点が挙げられる（今村2010）。

2 桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけに関する各研究者の見解

まず、桑ノ丸式土器と押型文土器との併行関係も含め、

桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけを中心に、各研究者の見解についてみていきたい。

円筒押型文土器が押型文土器の古い段階に位置づけられると最初に指摘したのは、山崎純男・平川佑介両氏であろう。両氏は「外面施文が横走施文であり、原体がやや大きく文様が大いものも含むが粗雑でなく、また口縁内面が無文のままである点を考慮すれば、押型文土器の古い段階に位置づけることが可能である。」（山崎・平川1986）としている。

桑ノ丸式器形の押型文土器に最初に着目したのは、新東晃一氏であろう。新東氏は、鹿児島県鹿屋市打馬平原遺跡の出土例を挙げ、「少なくともこの期には移入土器と在地土器の頻繁な接触があったことは確実視されている」と述べている（新東1990）。

前迫亮一氏は鹿児島県志布志市志布志町倉園B遺跡について再検討し、石坂式土器とその前後の様相に触れている。その中で桑ノ丸式器形の押型文土器についても触れ、新東氏の挙げた資料に追加資料を加え紹介している（前迫1993）。

楽畑光博・上田耕・雨宮瑞生の三者は出土状況に着目し、貝殻文円筒形土器の一部と押型文土器との共伴傾向を宮崎・鹿児島両県にわたる同一遺跡・同一層中の出土土器の組み合わせから両者の共伴傾向を探っている。その結果、「石坂式土器と下剥峯式土器には、稲荷山式や早水台式を含む横方向施文を基調とする比較的古い段階の押型文土器が伴う可能性がある」とし、「桑ノ丸式土器は、下菅生B式土器とその前後の時期の型式に並行すると思われる」としている（楽畑・上田・雨宮

1993)。その後榎畑氏は、貝殻円筒形土器の終焉を探る中で、1993年の榎畑・上田・雨宮三者による論文以降報告された遺跡における出土状況の検討と既報告事例の再検討を行っている。その結果下剥峯式土器は早水台式以前？、辻タイプは下菅生B式併行、桑ノ丸式土器は下菅生B式～沈目式（田村式併行）とさらに絞り込んで推測している（榎畑1997）。

水ノ江和同氏は、九州における押型文土器の地域性について北・東九州地域、西北・中九州地域、南九州地域の3地域に分け、検討を行っている。まず西北・中九州地域で見られる円筒形押型文土器について、山崎・平川両氏の考えが卓見とし、西北・中九州で稲荷山式土器がほとんど分布しない点と施文方向や文様の類似点から判断して、稲荷山式土器と年代的に併行関係があったと考えるのが最も妥当としている。さらに、器形がある程度復元できなおかつ量的に纏まった長崎県吾妻町弘法原遺跡の円筒形押型文土器をもって「弘法原式」を設定している。また、南九州地域に存在する桑ノ丸式土器独特とされる内湾ぎみの口縁部に縦位の山形押型文が施される資料に関しては、「本来、縦位の山形押型文は下菅生B式以降に見られない手法」としながらも、「文様自体は弘法原式のような古手の押型文と近似しており、また底部形態も大きな平底である」ため、南九州では最も古い押型文土器の一種と考えたいとしている。また、榎畑・上田・雨宮三者の論文に対し、「北九州と東九州で適用可能な大分編年を南九州で援用していること、円筒形押型文土器をヤトコロ式土器として認識していること、異型式土器の遺跡内共伴は年代差とならないのか等、いくつかの問題点も指摘されよう」としている（水ノ江1998）。矢野健一氏は南九州縄文早期の土器型式の問題について私見を述べる中で、この水ノ江氏の見解に賛同している（矢野1998）。

島田正浩氏は宮崎県宮崎市高岡町に所在する天ヶ城跡の調査報告書の中で出土した押型文土器の検討を行っている。まず、内湾する器形に「横方向の山形文+縦線」の原体を縦方向に施文した資料について、文様自体は神宮寺式土器から神並上層式土器に併行するものとみられていることを根拠とし、弘法原式土器より古いと位置づけている。さらに不規則な櫛描文を施文する桑ノ丸式土器に大きな山形文を横方向に施文する資料について、折衷土器が山形文のみでみられる現象であり楕円文は存在しない点、東九州において出現期の押型文は山形文のみであることが指摘されている点、天ヶ城跡で出土した折衷土器の山形文のうち、口縁部のものは縦方向ではなく横方向に施文される点から南九州における押型文の出現期の文様として稲荷山式よりも古く考えられるとしている（島田1998）。

大坪芳典・遠部慎両氏は、榎畑・上田・雨宮三者の意

見に対し、鹿児島県下でまとまって押型文土器を出土した主要な遺跡の出土状況を検討した結果、「下剥峯式土器や辻タイプに明確に稲荷山式以降の押型文土器が共伴したという事実はない」と考えており、それは榎畑・上田・雨宮三者が検討された表、「特に宮崎県北の状況をみれば、一目瞭然である」としている。また、前述の天ヶ城跡で出土している桑ノ丸式器形の押型文土器に口縁部より少し下にこぶが付けられていることにも着目している。「こぶ文」が押型文土器以前からみられる要素であり、かつ内湾する器形などを加味すれば、古く位置づけるのが妥当としている（大坪・遠部2000b）。その後、この天ヶ城跡出土資料の時間的位置づけに関して、口縁部に接する位置にこぶが付いている大分県杵築市稲荷山遺跡出土の陽弓式土器にあたる資料より古いとしている（遠部2004）。水ノ江氏や大坪・遠部両氏のように貝殻円筒形土器と押型文土器との一定の併存関係について疑問を抱いたり否定したりする見解に対し、上田耕・雨宮瑞生両氏は桑ノ丸土器の中に見られる押型文土器との折衷・融合土器が縦位施文であることに着目し反論している（上田・雨宮2003）。

八木澤一郎氏は上野原遺跡10地点の資料を分析し、微細山形押型文土器が集中して出土した地域では下剥峯式土器や円筒形条痕文土器が、山形押型文土器や楕円押型文土器が集中して出土した地域では桑ノ丸式土器が集中して出土した地域と重なっていることを指摘している（八木澤2001）。その後八木澤氏は再論を行っている。「各土器様式のうち、それぞれの型式組列上古い時期に位置付けたタイプ同士と、型式組列上新しい時期に位置付けたタイプ同士とが酷似した器形的特徴を示すとき、それぞれのタイプ同士が時間軸上近い関係にあると判断できる」とし、氏の見解を補強している（八木澤2003）。

黒川忠広氏は「桑ノ丸式土器の器形に押型文を施すものは、土器製作上では桑ノ丸式土器の範疇で、文様に関して押型文土器が融合したものと考えられる。このとき施文される押型文は、横位や縦位あるいは斜位の山形文であり、この施文パターンは下菅生B式土器に近いと考えられるのである」としている。さらに火山灰と押型文土器の関係に着目し、「南九州における押型文土器の存続期間はP13（Sz-Tk3:約9500年前）から米丸スコリア（約7700年前）までの間で収まる」と考えている（黒川2003）。この黒川氏の指摘に対し堂込秀人氏は「新東晃一（新東1990）・前迫亮一（前迫1993）の指摘以来の問題に決着をつけたものである」とし、評価している（堂込2003）。

金丸武司氏は宮崎における縄文時代早期前半の土器群を概観する中で、下菅生B式・桑ノ丸式期に両系統の属性を分解し、再編集した「融合土器」が成立するとしている（金丸2004）。

岩永哲夫氏はこれまで大分編年を援用していた宮崎県域において地域編年を提示している（岩永2004）。その後、対象地域を鹿児島県域まで広げ、改めて対象地域の編年案を提示している（岩永2006）。その中で桑ノ丸式器形の押型文土器は、弘法原式土器や稲荷山式土器に近い土器群と同じ第Ⅰ期に位置づけている。

上杉彰紀氏は桑ノ丸式土器類似の器形をもつ縦位施文の押型文土器以前に、横位または斜位を基調とする平底円筒形押型文土器が複数段階にわたって存在した可能性を指摘している。最も古い段階に別府原式土器の器形に類似する押型文土器、次の段階に中原Ⅴ式土器の器形に類似する押型文土器を挙げ、桑ノ丸式土器類似の器形をもつ資料が出現するのは前2者より新しい段階としている。また、熟考の必要性を承知の上としながら、「下剥峯式土器／桑ノ丸式土器＝早水台式・下菅生B式・田村式前半となろうか」としている（上杉2006）。

山下大輔・柴畑光博両氏は、現在までのところ「同一遺跡・同一層出土資料の組み合わせを網羅的に調べ、そのパターンを読み取る作業」や、「同一個体内での形態や文様などの属性の共存によって両者の共時性を証明していく方法」など援用的・補助的な方法論によってのみ異系統土器の相互関係を追及せざるをえない状況であるとしている。この状況を打開するために遺構内一括資料を抽出し、さらに南九州の押型文土器と下剥峯・桑ノ丸式系土器群の編年案の概略を提示したうえで検討を行っている。その結果、第2段階を中心とする押型文土器（大分編年の早水台式土器に近い土器群）に下剥峯・桑ノ丸式系土器群Ⅰ期の資料が、第3段階（大分編年の下菅生B式に近い土器群）・第4段階（大分編年の田村式土器（ヤトコロ式土器））の押型文土器に下剥峯・桑ノ丸式系土器群Ⅱ期の資料が共出する傾向が看取されたとしている。そして桑ノ丸式器形の押型文土器については下菅生B式土器段階以降とするのが妥当としている（山下・柴畑2007）。その後、山下氏は前稿の編年案について個別資料を取り上げて改めて検討している。桑ノ丸式器形の押型文土器は氏の分類でⅦ類と設定し、前項でも提示した編年案の第3段階に位置づけている。その根拠として、「外面の施文方向は型式変化の方向性として重視すべきと考えている」ことを挙げている。また、「器形・施文方向の異なる平底円筒形押型文土器の存在を考慮すると、やはり桑ノ丸式器形の資料は押型文土器系列の中でも後半期のものと併行関係にある」と述べている（山下2009）。

第17回九州縄文研究会福岡大会における討論の中で、桑ノ丸式器形の押型文土器について遠部慎氏・水ノ江和同氏・矢野健一氏の興味深い発言がある（林2008）。遠部慎氏は「施文方向から見れば、下菅生B式に相当するが、楕円文を含まない点から判断して山形文単純期、つ

まり川原田式・稲荷山式よりも古いと考えている」と発言している。これに続き、水ノ江和同氏が「私も、桑ノ丸式の押型文が山形文のみで構成されることを考慮して、弘法原式とともに古く位置づけたことがある²⁾」と発言する。さらに矢野健一氏が「桑ノ丸式の押型文と呼ばれるものは、桑ノ丸式とは無関係・別時期と考えている。むしろ弘法原式と基本的に同類であろう」と続けている。

遠部慎氏は炭素14年代測定を用いて、既存の円筒形貝殻文土器編年との整合性について検討を行っている。その中で「九州に押型文土器が出現するのは山形文期である可能性が高く、円筒形貝殻文土器の終焉である可能性が高い」（遠部2009）としている。

筆者は宮崎県宮崎市船引・時屋・鹿村野地区出土の押型文土器について分析し、Ⅰ～Ⅴ期に細分した。その中で桑ノ丸式器形の押型文土器については下剥峯・桑ノ丸系押型文土器Ⅰ式とし、Ⅲ期に位置づけた。また外面縦位施文であることを重視し、下菅生B式土器併行段階であるとした（今村2010）。

3 問題の所在と検討方法

これまで各研究者の桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけをめぐる主な見解をみてきた。東九州の押型文土器と桑ノ丸式土器・桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて各研究者の見解をまとめたものが表1である。また、東九州の押型文土器と各研究者が提示した南九州の押型文土器編年案との併行関係をまとめたものが表2³⁾である。表を見ると、各研究者間で桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけをめぐる見解が異なることが改めて理解できる。

各研究者の根拠を整理するとおおまかに①出土状況（柴畑・上田・雨宮1993、八木澤2001・2003、山下・柴畑2007など）、②文様・施文方向、③炭素14年代測定値（遠部2009）の3点が挙げられる。

①の出土状況については、竪穴式住居跡の床面出土資料など明確な遺構内一括遺物に恵まれないことが多い現状であるため、今後の資料の増加を待って改めて検証したほうが良いと考える。また、八木澤氏が上野原遺跡で行った遺跡内での分布状況を読み取る作業（八木澤2001・2003）は有効であると考えますが、他の遺跡でも同様な状況が窺えるかが重要である。今後の資料の蓄積とともに、報告書中において第3者でも分布状況の検討が行えるよう遺物の座標データの提示が望まれるところであろう。

③の炭素14年代測定値については山下氏が述べているように「ある程度の測定数の蓄積が前提であり、1、2点の測定値をもってして土器型式の時間軸上の位置づけを決定する方法論には賛同しかねる」ものであり、「型式学による土器編年と炭素14年代による土器型式の年代

的位置づけのどちらかが正しいという二者択一的なものではなく、両者が双方向的に検証し合い、より綿密な土器編年の確立が必要であることはいうまでもない」(山下2009)ものと筆者も考えている。

②の文様・施文方向についてはどの点を重視するかで各研究者の見解が異なっている。稲荷山式土器よりも古く位置づける根拠としては、桑ノ丸式器形の押型文土器が山形文のみで構成されている点(島田1998など)、こぶの付いた資料がある点(大坪・遠部2000bなど)が挙げられる。稲荷山式土器や弘法原式土器併行段階とする根拠は、文様自体が弘法原式土器のような古手の押型文と近似しており、また底部形態も大きな平底である点が挙げられている(水ノ江1998)。下菅生B式土器併行段階とする根拠は、外面施文が縦位の資料がある点が挙げられている(黒川2003など)。

このように異なる根拠から様々な見解が挙げられている現状を打破するには、新たな視点も必要ではないかと考えている。そこで、現在若干ではあるが存在が確認されている「楕円文が施されている桑ノ丸式器形の押型文土器」の分析を通して、桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて再検討していきたい。

4 対象資料の検討

楕円文が施されている桑ノ丸式器形の押型文土器は、2遺跡確認できた。これらの資料についてみていくこととする。

(1) 鹿児島県曾於市末吉町桐木耳取遺跡(第1図)

第1表 桑ノ丸式・桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけに関する各研究者の見解

	栗畑 1997	水ノ江 1998	島田 1998	黒川 2003	遠部 2004
山形文盛行期					
川原田式土器					
稲荷山式土器					
早水台式土器					
下菅生B式土器					
田村式・ヤトコロ式土器					

第2表 東九州の押型文土器と南九州の押型文土器との併行関係をめぐる各研究者の見解

	岩永 2006	上杉 2006	山下 2009	今村 2010
川原田式土器				
稲荷山式土器	第Ⅰ期	別府原式土器 併行段階	第1段階	Ⅰ期
早水台式土器	第Ⅱ期	中原V式土器併行段階	第2段階	Ⅱ期
下菅生B式土器		桑ノ丸式土器 併行段階	第3段階	Ⅲ期 Ⅳ期
田村式・ ヤトコロ式土器	第Ⅲ期(古) 第Ⅲ期(新)	白ヶ野段階	第4段階	Ⅴ期
手向山式土器	第Ⅳ期			

※網ふせ部分が桑ノ丸式器形の押型文土器を含む段階である。

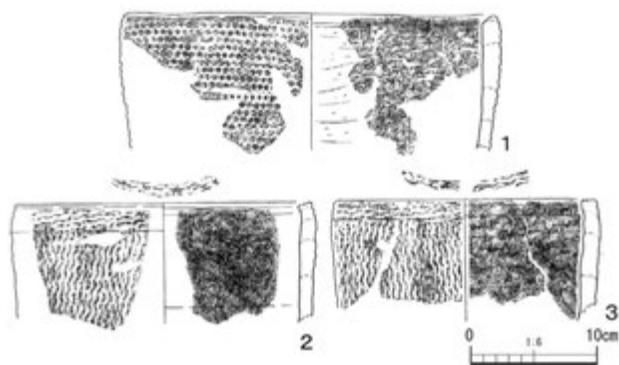
桐木耳取遺跡では、縄文時代早期前葉～中葉の土器として、前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・中原式土器・押型文土器・手向山式土器が出土している。その中で、桑ノ丸式器形の押型文土器も出土しており、楕円文(1)のものと山形文(2・3)のものがみられる。1は金色の雲母や白色粒を多く含む胎土である。外面に横位の楕円文が施されている。楕円文は連珠状を呈している。内面調整は口唇部がナデ、口縁部以下がケズリである。

(2) 鹿児島県南九州市川辺町永田西遺跡(第2図)

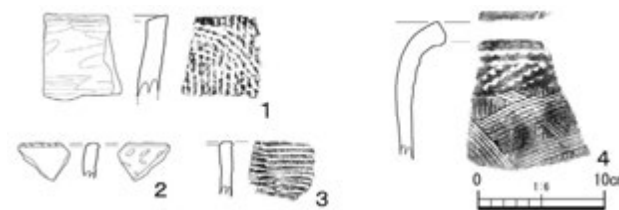
永田西遺跡は、1975年発見当時すでに大きく地下げられ、遺物が散乱する状況であった。その際表採された押型文土器が、本田道輝氏により紹介されている(本田1994)。1がその資料である。石英や角閃石を含む胎土である。外面に縦位の楕円文が施され、さらに弧状に一単位の楕円文が重ねられている。内面調整はミガキである。

なお、本遺跡で採集された資料は「多くの石坂式、少量の吉田式、円筒形条痕文、1点の楕円押型文土器など縄文時代早期土器に限られ、礫器も1点ある」(本田1994)ようである。以前本田氏によって紹介されたのは1点の楕円押型文のみであったため、今回数点ではあるが筆者が図化した押型文土器以外の土器も掲載した(2～4)。2が辻タイプ、3が中原Ⅲ・Ⅳ式土器、4が石坂式土器である。

検討した2遺跡の資料から楕円文の施文されている桑ノ丸式器形の押型文土器の特徴をまとめると、①「形態的特徴やケズリやミガキを施す内面調整、桐木耳取遺跡で出土した土器の胎土にみられた金色の雲母などは下剥峯式土器や桑ノ丸式土器、辻タイプにみられる特徴であり、今回検討した資料の製作技法はこれらの土器型式に



第1図 桐木耳取遺跡出土桑ノ丸式器形の押型文土器



第2図 永田西遺跡出土土器

類似する」②「楕円文の施文方向は横位のものと縦位のものがある」③「施文された楕円文は、ひとつひとつが独立した楕円文ではなく、楕円文の端部同士が連なった連珠状を呈する楕円文である」以上の3点が挙げられる。

②の施文方向については、以前楕円文の施文されている桑ノ式器形の押型文土器として、桐木耳取遺跡出土資料を例に挙げた上杉氏は「横位の施文方向を保持していることに対して、明快な説明を行うことができない」（上杉2006）としている。しかし、永田西遺跡出土の資料の存在により山形押型文同様、楕円押型文が施文される資料にも縦位のものがあることが証明されたと考える。

次に③の楕円文が連珠状を呈するという特徴に着目し、東九州の押型文土器⁴⁾と比較しながら、桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて考察していく。

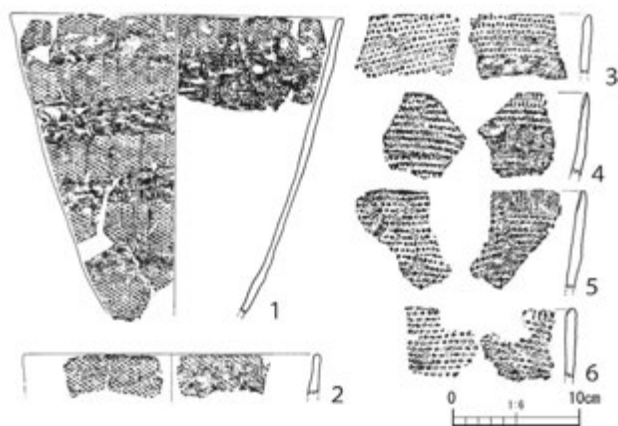
5 考察

連珠状を呈する楕円文がどの段階から出現するのか、筆者が以前実見した大分県臼杵市野津町菅無田遺跡出土の押型文土器（第3図）を参考に検討する。菅無田遺跡では、川原田式土器～田村式土器まで出土している。出土量は、川原田式土器が204点、稲荷山式土器が260点、早水台式土器が331点、下菅生B式土器が26点、田村式土器が84点である（坂本・牧尾1986）。連珠状を呈する楕円文は、川原田式土器（1）ではなく、稲荷山式土器（2・3）や早水台式土器（4～6）では確認できる。また、下菅生B式土器や田村式土器では確認できていないが、下菅生B式土器に関しては、出土量が少ないことも要因のひとつと考えられる。

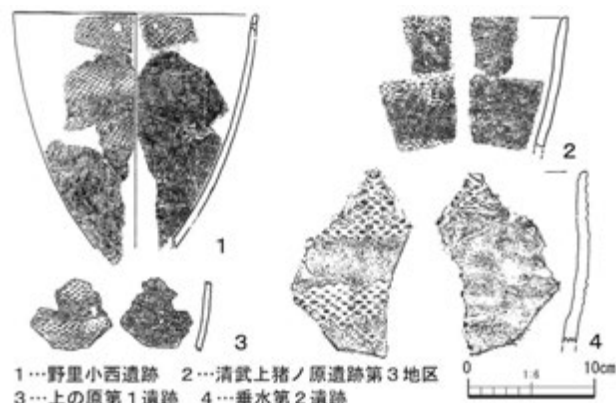
また、近年南九州でもベルト状施文の川原田式土器の出土例が増えてきている。楕円文のものは、鹿児島県鹿屋市野里小西遺跡、宮崎県宮崎市垂水第2遺跡、宮崎市田野町芳ヶ迫第1遺跡、鹿毛第3遺跡、ズクノ山遺跡E地点、宮崎市清武町上の原第1遺跡B地区、清武上猪ノ原遺跡第3～5地区、川南町国光原遺跡などで確認できている（第4図）。しかし、楕円文はいずれもひとつひとつが独立した小粒なものであり、連珠状を呈する楕円

文はやはり確認できない。このため、少なくとも南九州において、川原田式土器の段階に「連珠状を呈する楕円文」という情報は伝わっていないということになるだろう。以上から、連珠状を呈する楕円文は稲荷山式土器の段階に出現すると考えられる。下限については、連珠状を呈する楕円文が田村式土器に特徴的に見られる粗大な楕円文ではないため、田村式土器の段階ではなく、下つても下菅生B式土器の段階と推測される。よって、桑ノ丸式器形の押型文土器の時間的位置づけについて、連珠状を呈する楕円文をもとに考えると、稲荷山式土器～下菅生B式土器に併行する段階と考えられる。川原田式土器の段階にみられる小粒な楕円文から稲荷山式土器段階で楕円文が徐々に大型化する過程のなかで、楕円文の端部同士が連なった連珠状を呈するものが出現したのではなかろうか。なお施文方向を重視するのであれば、早水台式土器～下菅生B式土器に併行する段階とさらに限定できるだろう。前稿では押型文の施文方向を重視し、南九州において貝殻文円筒形土器と押型文土器が大部分で共存し、前稿のV期の段階で押型文単純期となるという見解を示した（今村2010）。今回の検討を踏まえても、その立ち位置は大きく変わるものではない。ただし、前稿では下剥峯・桑ノ丸系押型文土器1式が下菅生B式土器と併行するとしたが、連珠状を呈する楕円文に着目した今回の検討結果と併せて考えると一部早水台式土器にかかる可能性があると考えたい（表3）。

桑ノ丸式土器の段階は、楕円文が存在しない、あるいは極めて少ない時期であるため、桑ノ丸式器形の押型文土器に山形文が多いのではない。楕円文が一般的に存在する時期で、かつ「貝殻を主たる施文方法として用いるという規制が取り払われた段階」（黒川2003）であり、貝殻条痕文と視角的に類似する山形文を選択的に多用していたものという見解が妥当と思われる。前稿で述べたように、桑ノ丸式土器以前の段階はあくまで在地土器の製作技法の中で押型文という文様を取り入れた段階であり、貝殻円筒形土器の終焉とともにその規制は次第に解消されていくもの（今村2010）と考えている。



第3図 菅無田遺跡出土の押型文土器



第4図 南九州出土の楕円押型文施文の川原田式土器

	連珠状を呈する 楕円押型文	今村 2010	本稿における 変更点
川原田式土器	 	I 期	I 期
稲荷山式土器		II 期	II 期
早水台式土器			III 期
下菅生 B 式土器		IV 期	IV 期
田村式・ヤトコ口式土器		V 期	V 期
手向山式土器			

(発掘調査報告書)

- 秋成雅博・今村結記 2010 『清武上猪ノ原遺跡第5地区-3-』清武町埋蔵文化財調査報告書第32集
- 安藤正純 2007 『国光原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第149集
- 池畑耕一・黒川忠広・鶴田静彦 2006 『野里小西遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(100)
- 井田篤・秋成雅博 2005 『上猪ノ原遺跡-4-・下猪ノ原遺跡-2-』清武町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 井田篤・秋成雅博・今村結記 2008 『清武上猪ノ原遺跡-3-』清武町埋蔵文化財調査報告書第25集
- 宇田川美和・小山幸子 2002 『垂水第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第58集
- 面高哲郎・寺師雄二 1986 『芳ヶ迫第1遺跡 芳ヶ迫第2遺跡 芳ヶ迫第3遺跡 札ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書第3集
- 面高哲郎・日高正人 2002 『白ヶ野第2・3遺跡 上の原第1遺跡(B地区)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集
- 坂本嘉弘・牧尾義則 1986 『菅無田遺跡』大分県野津地区土地改良事業関係遺跡群発掘調査報告書
- 長野眞一・大保秀樹・松尾勉・野間口勇・八木澤一郎・岩戸孝夫・元田順子・真鍋雄一郎・馬籠亮道・鮫島伸吾・山元真美子 2005 『桐木耳取遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(91)
- 森田浩史・金丸武司 1998 『鹿毛第3遺跡』田野町文化財調査報告書第28集
- 森田浩史・金丸武司 2003 『鹿村野地区遺跡』田野町文化財調査報告書第44集

【図・表の出典】

- 第1図 報告書掲載の実測図より筆者作成
- 第2図 筆者実測・トレース
- 第3・4図 各報告書掲載の実測図より筆者作成
- 第1～3表 筆者作成

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要 **縄文の森から** 第5号

発行年月 2012年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail minami@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 (有) 国分新生社印刷

〒899-4301

鹿児島県霧島市国分重久 627-1
